

| 入試問題分析

| 英語

入試問題分析

空所補充・パラフレーズ・整序英作文・内容一致を中心とした1,200語を超える長文総合問題が2問（大問Ⅰには英文和訳もあり）と、英作文を含む空所補充形式の会話問題が1問で従来どおり。なお、大問Ⅱの設問E「起こった出来事の 順番を問う問題」だけが新傾向であった。

1,200語を超える長文を読み解き必要な情報を見つけ出すには速読力が必要だが、内容一致と英文和訳には高度な精読力も必要。空所補充には前置詞を含むイディオムの習得が、パラフレーズには単語集の派生語まで十分習得する事が必須。英作文は文構造よりも語彙力が問われる問題であった。

| 現代文

入試問題分析

大問一題全7問(記述+マーク)

出題形式は、①：空欄補充問題／②：傍線読解問題(選択)／③：内容一致問題／④：自由記述問題(40字)。

本学現代文の出題方式はここ20年大きな変動は無し。

①は「接続詞・副詞」「ことわざ・慣用句」などの知識が試される。②・③は各選択肢の正誤根拠が明確な分、文中のチェックポイントが多い。文章を細かくチェックするスタミナが必要で、過去問演習量がものを言う。④は文章から要点を抜き出した後、40字以内にまとめる編集力も求められる。MARCHの自由記述問題と比べると、この「編集」に手こずることが多く、難易度としては同志社大学の方がやや難しい。こちらも過去問演習が効果的。

| 古文

入試問題分析

単語・文法は基礎～標準レベルの問題。地道な努力がものを言う。傍線部解釈や内容説明も、一部で意識をする必要はあるが、基本的には単語・文法通りで解けるものが多い。内容合致の選択肢は話の展開順に並んでいるので、最初に目を通しておくと話の展開が分かりやすくなる。最後の記述問題は、程度の差こそあるが、話全体の趣旨が問われることが多い。30字という字数制限があるので、要点をしぼって書く練習が必要となる。また、本学では全6日程を通じて、ジャンルと時代は偏りなく出題される傾向にある。特に説話集と擬古文は同志社大学では頻出のジャンルである。文学史はあまり重視されない。

| 日本史

入試問題分析

大問数は昨年同様3題で、150点満点、小問は昨年の61問から60問にやや減少した。全体としては、難易度は昨年同様である。出題形式は、記述・選択が大きな柱で、大きな変更点は正誤問題がほぼ出題されず。2021年度は60問中、記述問題が27問、正誤問題が昨年の8問から1問に大幅減少し、史料問題と配列問題も出題されず。記述問題が多いのが特色である。ほぼ個別方式と作り方は同様になった。内容は、大問3題テーマ史からの出題で、大問Ⅰは原始から古代、大問Ⅱは中世・近世、大問Ⅲは近代となっている。近世と戦後は今年も出題されず。本年は、コロナ禍という影響からか、近代も明治初期までの出題にとどまった。大問Ⅰは「原始古代の遺跡」、大問Ⅱは「中世の日中・日朝外交史」、大問Ⅲは「幕末から明治初期の政治」から出題された。2021年度も原始は出題されたものの基本的に原始の出題も少ないので、原始と近世と戦後が苦手で、全般的にムラがなく得点でき、文化史が得意な受験生にお勧めである。文化史はかなりの確率で出題され、古代と近代の文化史が頻出である。

本学は、全体的にマニアックな用語での出題が少なく、授業の復習と教科書の学習による基本用語だけでほぼ満点が取れる。特に、今年はやや易化し、近世・戦後から出題されず、史料も出題されなかった。ただ、全学部日程では2019年度に近世の史料が出題されており、2021年度も一部の個別日程の2月8日と10日で出題されており、今後復活の可能性も否めないため、基本的な史料はおさえておきたい。本学の出題テーマを追っていくと、前年度と同じテーマがスライド出題されること、さらに別日程で出題されることが多く、既卒生および、他学部受験をする受験生にとっては有利な出題となっている。過去問研究と他学部の問題をやり込むことが効果的である。

| 世界史

入試問題分析

2021年度は大問3題、60問(記号42・記述18)。早稲田・慶應・明治レベルの受験生であれば、苦勞する設問は少なかったはずである。過去問演習を除く本学特有の対策は特段不要であり、万遍なく学習できている受験生であれば、9割以上は取れるだろう。